

プロジェクト A2「言語科学と英語教育研究会」理論 言語学部門

佐野まさき

はじめに

本号は、本学のプロジェクト A2「言語科学と英語教育研究会」(代表者: 中村純作・言語教育情報研究科教授)の理論言語学部門の研究成果の一部として書かれた論文の特集を兼ねている。

本研究は、まさに「言語科学」と「理論言語学」がキーワードになっており、本号に収められた論文も、これと何らかの形で関わるものになっている。しかし、言語研究の現状を考えたとき、この2つのことばは少し注釈が必要になってくる。

「言語科学」ということばは、せいぜい数年前から広まり始めた新しい言い方である。昔からあり現在も使われている「言語学」ということばがあるのに、しかも物理学や生物学などの場合はわざわざ「物理科学」や「生物科学」のような言い方をまずしないのに、なぜ「言語科学」という言い方をするようになってきているのか。それは、最近になってようやく科学と呼べるようになった言語学の分野ができたということではもちろんない。言語を科学分析の対象とする態度は、遅くともソシュールなどから始まる20世紀初頭の構造主義言語学の時代からあるのであり、構造主義に取って代わった生成文法では、特に Chomsky (1965) の著作 *Aspects of the Theory of Syntax* の第1章 (Methodological Preliminaries) において、言語を科学の研究対象とすることを踏まえた上での方法論が詳細に述べられている。実際、生成文法に直接携わるのであろうとなかろうと、この *Aspects* 第1章に書かれていることを意識してこなかった言語学者はこの40年間いなかったはずである。このことは、40年近く前の、生成文法に必ずしも組しない学者による言語学書(たとえば John Lyons (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge University Press)と、最近のそれ(たとえば Ray Jackendoff (2002) *Foundations of Language*, Oxford University Press)を開いて、共通に議論されているところを見るだけでも明白であろう。

それなのになぜあえて「言語科学」か。それは、たとえば物理学を専門とする科学者集団の中にいづとも物理学が科学であることは容易に理解されるのとは対照的に、言語学を専門とする科学者集団の外にいる人には、言語がそもそも科学の対象になるということがなかなか理解されないという現状が、少なくとも背景の一部にあると思われる。「言語学を専門としています」と言ったら、「すごいですね、何ヶ国語ぐらいしゃべれるのですか」とか「最近のことばの乱れをどう思いますか」などという反応も出てきてしまうかもしれないが、「言語科学をやっています」と言えば、そういう反応が出てくることも少なくなろうというものである。言うまでもないことだが、このような反応がよいとか悪いとか、まして言語学の科学者集団にいたことがよくて、いないことが悪いとかいった価値判断をしているのではない。ことばはきわめて身近な

もので、あらゆる人々の関心の対象となりうる。それだけに、言語というものが、たとえば英語と日本語との間の表面的な違いを超えた（あるいは日本語の「正用」と「誤用」の違いを超えた）、普遍的抽象的法則性を見出しうる対象となりうるということが、かえって理解できないことになっているのである。「物理学」などという必要はないのに、わざわざ「言語科学」と言わなければならないゆえんである。

一方、「理論言語学」ということばは、「言語科学」に比べてかなり以前からある言い方である。しかし、「言語学」が科学である以上「言語科学」が余剰的表現であるのと同様の意味で、「理論言語学」も余剰的な側面がある。

「言語学」が言語を分析の対象とすることに異論を差し挟む人はいないであろう。しかし、言語に限らず、あることを分析するには、そのための道具が必要であり、道具無しでは何もできないということは確認しておかなければならない。いや、私は道具は使わず手だけでやりまうと言っても、すでに「手」という道具、条件の中に自らを置いているのである。言うまでもなく、道具とは、モノの料理の仕方やモノの見方を条件付ける枠組みであり、広い意味で理論と言ってよい。見方を条件付け、その条件によって初めてモノを見ることを可能にする理論がなければ、モノが捕らえられないどころか、そもそもモノ(事実)自体が存在しなくなるとさえ言えるのである。酸素の発見者はラヴォアジエとされているが、酸素の発見という「事実」は、そこに前提にされている酸化・還元理論によって初めて「事実」になる（村上陽一郎『新しい科学論』、180ページ、講談社）。言語からの身近な例を出すなら、たとえば「赤ん坊がウィスキーを飲んだ」というのと「ウィスキーを赤ん坊が飲んだ」というのを見て、日本語は語順が自由な言語であるという「発見」をするためには、問題の2つの文をあるレベルで「同じもの」と見る見方（理論的仮説）をすでに前提としているのである。

このように考えれば、分析対象となる文例が、たとえそれが言語学者の頭の中で作られたものであっても、アンケート調査によるものであっても、あるいは実際に新聞や小説の中から拾い上げられたものであっても、それを見る見方を与えてくれる理論があって初めて分析対象になるということも分かるであろう。そもそも、ある程度の理論的仮説があるからこそ言語学者は頭の中で例文を作ることができるのであり、調査の中身を考えられるのであり、小説や新聞から何を探すべきかが分かるのである。言語学が何らかの理論を背景にしなければ成り立たないという意味では、「理論言語学」という言い方は余剰的ということになる。

もちろん、「理論言語学」という用語における「理論」ということばは、今見たような広い意味を意図しているというよりは、たとえば「記述言語学」や「コーパス言語学」、「応用言語学」などと言われるものから区別する意味で使われているというほうが実情であろう。しかし、記述言語学、コーパス言語学、応用言語学などが理論を無視することはあり得ないのと同様、理論言語学も言語の記述面やコーパスを無視することはあり得ないのである。本研究会の「理論言語学部門」も然りである。留意すべきは、「理論」と「応用」のような用語上の区別が、単に強調すべき側面の違いにとどまらず、分野上の仕切りにつながり、ひいては互いに排他的な印象まで与えてしまうことがあってはならないということである。

本号に収められた論文も、理論へのコミットの仕方や問題とする対象がさまざまであるが、これはむしろ当然のことである。言語を研究する者にとっては、ことばに関するあらゆることが興味の対象になるのである。